アイ・コンタクト

成長発達にとっての意味

「アイ・コンタクト」は、端的に言えば「目が合う」「目を合わせる」ということです。「目を合わせる」とは、相手を見つめつつ相手から見つめられているということになります。目を合わせている者同士は互いに相手の存在を認識し、互いに自分自身も認識していることになります。アイ・コンタクトにはさまざまな状態が考えられますが、主には見つめ合う、にらみ合う、ある出来事に遭遇し瞬間的に見合わせるなどがあると思います。この偶然の瞬間を除けば、目が合う状態は見ようとする互いの意思が存在します。どちらかが視線を避ければアイ・コンタクトは成立しないことになります。また、アイ・コンタクトはさまざまな意味をもちます。恋人同士はじっと見つめ合いながら目と目でコミュニケートし互いの愛情を感じとっていると思われますし、相撲のしきりでは互いににらみ合って、互いの戦略を読みとろうとしたり戦意を高揚させたりしています。また偶然の出来事に遭遇し、その瞬間に目を見合わせた者同士はそのことを共有し、たとえ見知らぬ者同士であってもコミュニケーションが成立する場合もあります。

それでは、いつごろからアイ・コンタクトができるのでしょうか。赤ちゃんとはいつごろから目が合うのでしょうか。

生後１カ月でもアイ・コンタクトが成立することもあるそうですが、２カ月前後になるとアイ・コンタクトにこたえて声を出したり笑ったりするそうです。一般には生後２～３カ月になると、赤ちゃんと養育者の間である種の会話らしきやりとりが可能になってくると言われます。赤ちゃんが機嫌のよいときにうまく調子を合わせて対面で話しかけると、赤ちゃんはしっかりと目を見つめて手足を動かしつつ声を出したり笑ったりするようです。

次第に、相手の視線の先にあるものを自分も追ったり相手の目から気持ちや意志を読みとったりなど、相手の視線を読むようになります。身近な人々と温かいまなざしを交わしながらよい関係ができてくると、５歳児くらいでは、言葉で言わなくても、少し離れていても目線で合図を送ったり制止や承認をしたりし合えるようになります。心と心をつなぐ重要なポイントです。

子どもの姿 1　「ママのめめも本当は優しいよ」（３歳児）

アキエはぬいぐるみが大好きで、園に来るとぬいぐるみの犬、うさぎ、くまなどを小さな乳母車に乗せて「おさんぽ」と言って、まず園庭を一回りします。それからままごとコーナーに落ち着き、ぬいぐるみたちのお母さんになって、ごちそう作りを始めます。この日も同じように動いているのですが、元気がありません。担任は気になりながらもなかなか持ち物の始末ができない子どもの世話をしています。一段落したので、担任はアキエのところに行き、「アキエおかあさん、おはよう。忙しそうですね。お子さんたちは元気ですか？」と顔をのぞきこみながら言うと、突然、抱きついてきました。ふだんそのようなことがないので担任はびっくりしましたが、しばらくじっと抱きしめていました。だんだん体の緊張がほぐれてきたので、抱っこしたままアキエの体を少し離して、目を見ながら「悲しかったのかな？それともちょっと寂しくなっちゃったのかな？」と言うと、「うん」と言って担任の目をじっと見ています。担任がにこっと笑うとアキエも笑い「ママに怒られたの」とぼそっと言いました。「そう、ママに怒られちゃったんだ。それで元気なかったんだ」「うん、ママのめめ怒ってた」「そう、ママのめめ怒ってたの。でももう大丈夫ね？」と笑いかけると、「先生のめめ優しい。ママのめめも本当は優しいよ」と言って、先生のひざから降りて遊びに戻っていきました。

子どもの姿 2　「先生の目、笑ってる」（４歳児）

４歳児のテツオは入園したときから、視線が合わないので担任は気になっていました。朝、登園したときに「テツオくん、おはよう」と顔を見ながら言うのですが、「おはよう」と返事はしても視線は庭の遊具の方を見ています。そちらに興味があるのはわかるのですが、担任は寂しくも思っていました。またテツオは次々といろいろな遊具にかかわり、落ち着かない状況にありました。ある日、テツオが一人でつまらなさそうにしているので、「テツオくん、先生とにらめっこしよう」と誘い、二人でにらめっこをしました。何回かしたとき、テツオが「先生の目、笑ってる。優しい目」とぼそっと言いました。びっくりしてテツオの顔を見ると、じっと自分を見つめているテツオと視線が合っています。

うれしくなった担任は、思わずテツオを抱きしめていました。それ以来、テツオと担任は目と目を見合ってあいさつができるようになり、落ち着いて遊びに取り組む様子も見られるようになりました。

＊指導及び援助のポイント

その人の優しさは言葉でも表せますが、それ以上に「目」が心を表します。たまに「言葉は優しいが目が笑っていない。真意は別ではないかと思った」という感想を聞くことがあります。子どもたちは正直ですし、感性には鋭いものがありますので、表面的な優しさでは心を開きません。まずは、自分に注がれるまなざしで感じるのではないでしょうか。また、子どもは言葉で自分の気持ちを十分に表せないときには、じっと目で訴えることもあります。周囲の大人は心からの慈愛のまなざしで子どもたちを慈しみはぐくむことが大切ですし、子どもたちの心をその視線から読みとることが重要です。大人は往々にして言葉で説得し、納得させようとむきになってしまいがちですが、多くは語らなくてもこのような無言のうちに気持ちが通じ合うことでいっそう愛情を深め、信頼感が高まり合います。アイ・コンタクトは、互いにわかり合い、互いを尊重し合うための手段の一つとして大切にしていきたいものです。

知っ得

「目は口ほどにものを言い」とは古来より言われていることです。子どもに対するときは頭の上から話しかけずに目線を下げて、目と目を合わせながら温かなまなざしを言葉に添えましょう。また、「目は心の窓」とも言います。窓がくもらないように大人が気をつけましょう。

甘え

成長発達にとっての意味

２歳を過ぎるころから、何でも「イヤ」の反抗期が始まり、「自分で自分で」と主張します。自分でしたいという欲求があると自分で試行錯誤し、その中で少しずつできることが増えて自信も出てきます。しかし一方で、自分でできるということは任せてくれることではありますが、大人が目を向けてくれなくなるということでもあります。そのことに気づき急に不安になってくる時期があります。特にこのような状態のとき、また弟妹が生まれるなどお母さんが忙しい状況が重なると顕著に「甘え」が表れることがあります。兄や姉になる喜びと不安を感じ、子どもによっては非常に不安定になり、いわゆる「赤ちゃん返り」という状況を呈することもあります。また、生活面や行動面での自立が見られ、自分のできることは自分でやろうとする意識が高まる４,５歳児でも甘えが見られます。これは自分をしっかり見守ってほしいというサインの表れのこともありますが、別の意味もあります。子どもは何歳になっても甘えたいものです。特に気持ちがすっきりせずモヤモヤしたときは、誰かに寄り添いたくなります。例えば友達との遊びの中で思うようにならなかったり、また周囲から期待されたりする中で自信のなさを感じたり、思うようにならないことやがまんしなければならないことなど、複雑な気持ちから自分だけではどうにもならない状態になることがあります。そのようなとき、安心できる大人に甘えながら自分で自分の気持ちを立て直したり調整したりしていることが多くあります。行動の範囲や交友の範囲が広がるほど、５歳児でも小学生になっても甘えが必要な場合があります。

子どもの姿 1　「ヤッテ！」（２歳児）

エイコは、もうすぐ３歳です。イヤイヤ連発の反抗期も少し落ち着いてきましたが、反面自分でできていたことを「ヤッテ！」と大人に訴えることが多くなりました。靴を履ことやボタンはめなどは上手にできていたので、「自分でやってごらん」などと言おうものなら、ひっくり返って大泣きします。「わかった、わかった」と大人がやってあげると至極満足そうなエイコちゃんです。

子どもの姿 2　「寂しいの…」（５歳児）

就学を前にした２月下旬、５歳児クラスのケンタは、昼食時に保育者の体にもたれかかったり、クラスで集まったときにフリーの保育者のひざに乗ろうとしたりして、身体的接触による甘えを見せるようになりました。ケンタ自身は何も言いませんが、元気がありません。担任が母親に家での様子を聞いてみると、家庭内の事情で母親自身にゆとりがなかったこと、また小学校入学を前にして、給食のことや友だちと別れてしまうことなどにいくつかの不安材料があることがわかりました。

＊指導及び援助のポイント

甘えは、子どもの不安のサインです。子どもがだんだんに成長し、できることが増えてくると、つい大人も「できるんだから」と子どもだけに任せようとし、子育てにも手を抜きがちになります。自立心をはぐくむためには、手は抜いても、目と心を向けることが肝心です。大切なことは「いつもあなたのことを見ているよ」という確実なメッセージが子どもに伝わっているかどうかです。不安定な気持ちでは、自立心や自主性、主体性は育ちません。「ヤッテ！」と言ってきたとき、すぐにやってあげるのは「甘やかし」です。大切なのは「見ててあげるからやってごらん」と、しっかりと見守ることです。そして「できたねぇ、すごいねぇ」と子どもの成長を伝え、喜びを共有することです。自分一人でやらなければならないときでも、お母さんはいつも見ていてくれるという安心感があれば、子どもはしっかりとやりますし、また新しいことにもチャレンジしていくでしょう。大きくなっても、もうお兄ちゃんだから、小学生なのだからと突き放すのではなく、しっかりと受け止めるとともに、子どもは自分で自立していくのだという信頼を子どもに寄せていきましょう。

「甘やかし」は子どもが育ちませんが、「甘え」させられるゆとりが、保護者や保育者にあることは、子どもの安心感、自立心をはぐくみます。

知っ得

甘えて親を求めてくるのは、長い人生のほんのひとときなのです。「甘やかし」と「甘えさせる」を見極める目と心をもちましょう。甘えてもいいこと（とき）、甘えてはいけないこと（とき）が判断できるようにしていきたいですね。

いざこざ

成長発達にとっての意味

「いざこざ」は、ささいなもめごとのことでけんかとは別に考えたいと思いますが、高じるとけんかにまで発展してしまうことがないとは言えません。最も単純ないざこざは、園生活では日常茶飯事です。例えば、登降園時の身じたくの際、隣同士が触った、ぶつかった、邪魔だといったことから起きますし、自分が使っている遊具を黙って取ったとか自分が作ったものを触って壊したなど、枚挙にいとまがありません。このようないざこざは、いつまでも後を引くことはありませんが、この経験が成長・発達にとって意味のあるものになるかどうかは、その場の保育者の対応にかかってきます。

保護者の中には小さないざこざも避けたい、避けてほしいという要望があります。この傾向は最近強くなっているように思いますが、実はこのささいないざこざは、人とかかわる力の育成には欠かせない体験なのです。いざこざで「ちょっといやな思いをする」、解決して「ほっとする」、この両方の感情の体験が相手の気持ちを推し量る基を自分の中に作っていくことになります。

先のようないざこざは比較的年齢の低い幼児同士で起こりますが、５歳児くらいになると同じ遊びをしていたり同じ目的に向かって活動していたりしたとき、互いの思いが行き違ったり考えが食い違ったりしたときに起こることが多くなります。そこでは、それぞれが自分の思いや考えを伝えることによって調整が行われ、納得し合う姿が見られることもあり、互いに了解できると、以前より結束が強まることもあります。この「了解」が成立するためには個々の成長も大きく影響しますが、ささいないざこざを通して互いにその人となりのようなものがわかり合っていることも大事な要件になります。

子どもの姿 1　「だって　いやなこと言うんだもん」（４歳児）

４歳児の女児が４,５人でおうちごっこをしているところにアヤコが来て「入れて」と言うと、サツキが大きな声で「ダメー！」と言いました。アヤコとサツキは家が近所で入園前からよく遊んでいたようですが、思いが対立することもしばしばだったようです。

「ダメー」と言われたアヤコは「なんでよう！」と聞き返しますが、サツキは「だってだめなんだもん」としか言いません。するとアヤコは大きな声で「サツキのうそつき！ばか！だぁいきらい！」と言ってその場を離れようとします。それを見ていた保育者はアヤコに「どうしてサツキちゃんはだめって言ったんだろうね。もっとよく聞いてみようか」と言い、一緒にサツキのところに行き、アヤコに自分でゆっくり聞くように促します。するとサツキは「だってアヤちゃん、いやなことばかり言うんだもん」と答えたのです。確かにさっきのように言われたのではいやな気持ちがすること、あまりいい言葉ではないことをアヤコに伝え、サツキには入りたいのに断られたから悔しかったのだということを伝えました。そして、再度二人の気持ちを確かめたところ、「入りたい」、「入れてもいい」ということになり、一緒に遊び始めました。

子どもの姿 2　「昨日　約束してたのに」（５歳児）

５歳児のスミコは、前日サナエと積み木で家を作って遊び、「明日もまたやろうね」と約束をしていました。ところが翌日、数人がリレーを始めると、スミコはその仲間に入ってしまいました。サナエは「約束してたのに！」とカンカンに怒って、リレーをしているスミコを呼び出して「一緒に遊ぶって約束してたのに、なんで？」と強い口調で言います。スミコは「ごめん、１回やったら戻るから」と言いますが、サナエは「もういい！絶対遊ばないから」と言い、保育室の方に行ってしまいました。スミコは困った顔でしばらく考えていましたが、リレーのところに行って「あたし、リレーやめるからごめんね」と伝え、保育室に行きます。

サナエに「ごめんね。やっぱり一緒に遊ぶから」と言うと、サナエも「いいよ」と言い、二人で積み木を並べ始めると、昨日の仲間も集まってきました。保育者は二人のそばに行って「どうするかと思っていたけど、よかった。約束は約束だもんね。でも自分たちで解決できるなんていいな。お姉さんになったんだね」と言うと二人はクスっと笑いました。

＊指導及び援助のポイント

いざこざは起きないように配慮することよりも、起きたあとの対応が大切です。４歳児未満では、一方が泣いたり怒ったりして大人になだめられておさまり、相手は無関心のことが多いのでいざこざにもなりませんが、４歳児くらいになると双方に言い分がありますから一方だけではすまなくなります。このいざこざの体験は仲間と一緒に生活する方法を身につけるよい機会ですから、保護者や保育者は解決を急がずに一つひとつのケースに応じて、必要な体験が得られるように対応することが望まれます。この体験の積み重ねが自分たちで解決の方向を探る糧になります。そして自分たちの力でできたことを認めるのはもちろんのこと、その価値をもう一度子どもたちに伝えることによって、自分たちの成長を実感できるようにしたいものです。相手がいて自分がいることの必要性を感じることが、ともに生活するうえでの基盤と言えます。また、一つひとつの小さな体験を大事に積み重ねていくことが大きなトラブルを防ぎます。

知っ得

いざこざは感情や言葉によって大きく左右されます。言語表現の一番のモデルは大好きな保護者や先生です。美しい日本語を大切に伝えたいですね。

うそ

成長発達にとっての意味

「うそ」は、事実ではないこと、正確ではないこと、適切ではないことなどをあたかも事実であるように、また相手が信じるように言うことですが、幼い子どもの場合は、見え見えで他愛もないものが多いものです。また、子どもがうそを言うようになったということは、秘密を保持できるようになったことや保護者あるいは他の人との間に心理的距離をもてるようになったことによると言われます。

うそをついたり人をだましたりということは、知恵がついてきたからと言えます。ある意味では見通しがもてる、因果関係がわかる、相手の気持ちと自分の気持ちの兼ね合いが理解できるなどの育ちが見られるようになったということですが、そこまで考えておらず、現実と非現実（夢や願望）が定かではないこともあります。

うそは、自分にとって不都合なことを都合よくしようとしたり自分をよく見せようとしたり、自分の存在を守ったりなど自分の利益中心に言われ始めますが、５,６歳ごろになると次第に他の人の利益も考えられるようになります。だからといって、うそをついてもよいということではないと思います。大切なのは機を逃さずに、うその内容とそれを言わずにはいられなかった気持ちを受け止め、適切な指導をすることだと思います。

うそには、聞く者の立場によって楽しいものとつらく悲しいものの両面があることを常に考えられなければなりません。また、うそは人を助けることもありますが、人を陥れることもあります。この兼ね合いは、人とのかかわりの中でさまざまな感情の体験をすることと理解力、判断力、思いやりなどの育ちが大きくかかわりますので、相当の月日を要します。

子どもの姿 1　「だって　お母さんに叱られる」（４歳児）

４歳児さくら組の担任はこの一週間ほど、毎日のように半分以上は食べたと思われるご飯とおかずが捨ててあることに気づき、「いったい誰だろうか」と思い、気になっていたのですが、なかなかわかりませんでした。次の週の月曜日、担任は自分の弁当を少量にして早めに終わらせ、食べ終わって「ごちそうさま」と言う幼児の様子を見ていました。担任は『多分食べ終わるのが遅い子だろう』と予想していましたが、比較的早くレイがこっそりと立ち上がり、弁当箱を持ってごみ箱に捨てに行きました。みんなが動いているときだったので今まで気づかなかったのです。他の子が午後の遊びに夢中になっているときにレイにこっそり尋ねると、「全部きれいに食べないとお母さんに叱られる」と言うのです。担任は、どうして食べられないのか、嫌いなものなのかなどを尋ねると量が多いとのことでした。担任はそれでも食べたと言ってうそをつくのはいけないこと、お母さんはたくさん食べて大きく、丈夫になってほしいと思っていることを伝えました。その日の降園時、母親にレイの気持ちを伝え、量の調節を申し出ました。母親も了解し、レイが捨てた分量を減らすようになり、レイも安心してお弁当が食べられるようになりました。

子どもの姿 2　「ぼく　知らないよ」（５歳児）

５歳児の男児が５,６人で忍者ごっこをしています。サトシが提案して修行をすることになり、みんな裸足になってはしごを渡ります。そのうちに渡り方が違うとサトシが言い、トオルが「いいんだよ、これでも」と言いますが、サトシは聞きません。他の子もサトシについて「そうだよ」と言うので、トオルは抜けてしまいます。片付けるときになってサトシの靴が見当たりません。みんなで探しますが、見つかりません。ヒロシが「そうだ、トオルくん、サトシくんの靴がないの。知らない？」と聞くと「ぼく、知らないよ」と言い、気にした様子はありません。担任も一緒になって探しますがわかりません。その間のトオルの様子が気になった担任がこっそり聞くと、自分が隠したというのです。理由は自分のことをわかってくれなかったから、悔しかったと言うのです。担任は気持ちを受け入れながらもしていいことといけないことを伝え、サトシにも楽しく遊ぶためには他の人のことも考えなければならないことを伝えたのでした。

子どもの姿 3　「きのう　遊園地に行ったんだよ」（4歳児）

４歳児のミサトは「きのうね、遊園地に行ってきたよ」と登園するとすぐにうれしそうに報告に来ました。楽しい話だったので降園時に母親に伝えると「えっ？出かけてませんけど」と困惑した表情でした。

＊指導及び援助のポイント

「叱られるから」「悲しませるから」「意地悪されたから」など、自分と人とのかかわりでうそをつきたくなる気持ち、つかずにはいられない気持ちが高まったとき、うそになるようです。周囲の大人は基本的にはうそをついてはいけないという姿勢が大切です。大人でもしたくなるのが、責任回避をしたいとき、「つい」ということがあります。指導にあたっては、周囲の人が困る、不安になる、混乱する、いやな思いをするということを具体的な場面に応じて伝え、自分が反対の立場に立ったときのことを考えたり体験と合わせてわかったりできるようにしていくことが必要です。観念的なことをただ言い聞かせていても現実感はもてません。自分が困った、いやだったということから相手の立場を考え、自分で気持ちを抑えていけるようにしたいものです。

意図的になされたうそは比較的、理論的に諭しながらの指導ができるのですが、非現実的な体験話は難しいものがあります。４歳ごろまでは時間の経過が把握できませんのでだいぶ前のことも「昨日」になったり「明日」になったりします。「明日行ったよ、ほんとだよ」などということはしょっちゅうですから、いちいち目くじらを立てていてもしかたがありません。また、言いだしたら「本当」と言い張りますから解決にはなりません。いずれはなくなることですから「ずっと前行ったよね。楽しかったね」と、楽しかった内容に気持ちをもっていくほうがよいと思います。決してうちの子はうそばかりついてとか虚言癖があるなどと思わないほうがよいでしょう。

知っ得

うそについては古くから「うそも方便」「うそつきは泥棒の始まり」などさまざまですし、このことからも両面あるのがうかがえます。子どものうそに潜んでいる心の成長を探ってみては？

おどけ

成長発達にとっての意味

「おどけ」は、年齢にかかわらず見られることがありますが、５歳未満児では精神的な面から発するというよりは、周囲が喜んだりおもしろがったりすることから繰り返されることが多いように思われます。

５歳児ころのおどけは、恥ずかしいという精神面での成長や、複雑な感情を自分でおさめられない感情のはけ口として、あるいは緊張を変えたいときや笑いをもたらしたいときに表れると考えられます。また自分の存在をアピールしたり、注目されたいときにも表れます。その表し方は、一人ひとりの人柄や個性、発達の状況に応じて異なりますし、おどけではなく、別の表し方で気持ちの整理をする子も多数います。いずれにしても「表す」ことは、その子の気持ちを知るうえで大切なことです。

子どもの姿 1　照れる気持ちを表して

４,５歳児計70名の園児たちが集まって誕生日会が始まりました。今月の誕生児としてみんなの前に立ったユタカは、日ごろから注目される場面を苦手としています。今回も照れくさかったのでしょうか。その感情をおさえきれずに、わざと片足で立ってコケてみせました。静かな雰囲気の遊戯室に、どっと子どもたちの笑いが起こり、空気が和みました。

前に立って自分の名前を小さな声で言えたユタカでしたが、やはり落ち着かないのでしょうか、その後も何度かわざとコケてみせました。そのたびに、子どもたちから笑いが起こって、ユタカは安心した表情になっていきました。数回繰り返したあとは特にそのような動きをせずに、誕生日会に参加していました。

＊指導及び援助のポイント

子どもは自分の感情をどのように表してよいかわからないときがあります。おどけは引っ込み思案で目立とうとしない子や、思いはありながら自分を出さない子など、十分出せない子に起きやすい行動の一つでもあります。このような行動は、周囲がしらけることもあり同じ場で長い時間、あるいは何回も繰り返されることはほとんどありません。大人は注意して無理にやめさせようとしないで、その子の気持ちを受け止め、安心感がもてるようにすることが大切です。

おどけの裏にかくされた悲しさや寂しさを察知することも必要でしょう。

知っ得

おどけはそのときの気持ちの表れ、まずは受け止めましょう。

「恥ずかしいのね」とか「テレくさいのね」など優しく声をかけると落ち着くこともあります。また自分をアピールしたいときには、そのことが十分伝わるように仲介してもいいですね。

思いやり

成長発達にとっての意味

「思いやり」は人の立場になって考えたり気配りをしたりすることですが、幼児も友達に「優しくしよう」とか「助けてあげたい」という思いで行動します。しかし、まだ相手の思いや状況に応じるよりは自分の一方的な思いでかかわることが多いので、ときとしてそのことが余計なお世話になることもあります。真の思いやりは表面的なものでなく、また人に言われたり要求されたりしてすることでもありません。自分にとって大切な相手、心を寄せる相手の立場に立って、その人の気持ちや状況をくみとって動くことです。そのことで結果として感謝されることもありますが、はじめから見返りを求めての行動は思いやりがあるとは言えません。とは言え、２，３歳ごろに家の人に「これ、お父さんに渡してね」とか「あれ取ってちょうだい」などと言われて、その通りに動き「ありがとう」と感謝されたり「よくわかったね」などとほめられたりする経験が、思いやりをはぐくむことと無関係ではありません。どういう状況や状態のときに自分がどう動けばみんなが助かり感謝されるのかは、このような経験の積み重ねの中で獲得していくことが多いのです。

幼児は、自分のしたことと相手の反応（喜ばれたかそうでもなかったか）を見て、自分の行動の結果を理解していきます。しかし、幼児同士の場合、互いに未熟なために的確な反応が得られるとは限りません。むなしい思いが残らないように、周囲の大人が補いながらよい経験にしていく必要があります。このような体験を繰り返しながら、「どういうことが相手にとってよいのか」に気づいていきます。互いに相手が自分にとってよい人であり、必要とする人であるという関係ができると、相手への愛情とともに思いやりの心がはぐくまれ、その気持ちが行動として現れます。

子どもの姿 1　「余計なことしないで！」「親切にしたかったのに…」（5歳児）

園で帰るしたくをしているとき、アヤコのタオルがまだタオルかけにかけたままになっているのに気づいたエミは、仲よしのアヤコに届けました。ところがアヤコは「余計なことしないで」とエミに強い口調で言いました。エミは思いがけないアヤコの反応にびっくりして、泣き出してしまいました。担任が二人に話を聞いてみると、アヤコは「自分のことは自分でしようと思っていた。みんなからそんなに遅れていないので、まだいいと思っていた」ということであり、エミは「タオルかけに残っているタオルが少なくなってきたので、アヤコが困ると思った。仲良しのアヤコが困るのは自分もいやだと思った」ということでした。担任はどちらの気持ちも大切なことを伝えながら、やはり、エミには黙って渡しただけではエミの気持ちが伝わらないことを、アヤコには、まずは感謝の気持ちを表してから自分の思いを伝える方がよかったのではないかということを伝えました。自分のことは自分ですることの大切さと、友達に親切にしたいと思う優しさについて考えるよい機会になりました。二人は互いの気持ちがわかり、手をつないで帰っていきました。

子どもの姿 2　こうやるといいんだけど…（5歳児）

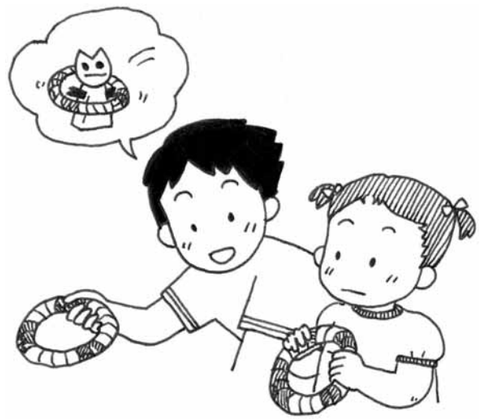
ごっこ遊びでお化け屋敷やさまざまなゲームコーナーができたので、地域の未就園児を招待することにしました。リョウは5人の仲間と輪投げコーナーを作り、親子で来た客に輪を渡し、親子で楽しむ様子を見ていました。そこへ2歳くらいの女児が一人でやってきました。リョウたちは困った顔で見合っていましたが、リョウが輪を一つ持って投げる動きをしながら渡すと、女児は受け取ったものの動こうとしません。困ったリョウは別の輪を持って女児のそばにしゃがみ、目を見ながら実際に投げて見せます。すると、女児はにこっとして投げました。リョウたちはほっとした顔で見合いながら手をたたき、次の輪を渡しています。女児は何回か投げると他へ行ってしまいましたが、5人はうれしそうでした。

リョウはどちらかというと自分中心の言動が多く、このような場面に初めて出合った担任は感激するとともにリョウの別の面が見られたことで理解が深まりました。他の子どももそれぞれの場面でいろいろ考えたり、苦労したりしながらも相手に合わせた対応をしていました。

＊指導及び援助のポイント

多くの家庭では思いやりのある子に育ってほしいと願っています。そのためについ「優しくしなさい」「親切にしなさい」と言ってしまいがちです。思いやりは子ども自身が愛情につつまれ、厳しい中にも優しくはぐくまれていることを実感し、家庭の中で自己有用感や自己存在感を感じ、安定した生活を送っていることが基盤となります。

幼児期の思いやりの行動は自分なりの思いつきで、あるいは自分なりの考えから発することが多く、経験も不足していることから、必ずしも相手の状況を好転させるものでなかったり余計なことだったりします。最近では、小中学生との交流の場が多くなり、具体的な場面で、思いやりのある行動を自分がしてもらっていますので、そのことを年下の子にしている場面に多く出合います。年下の子へは素直に、抵抗なく表せるようです。そのような場面を大事にしながら、その行動の大切さがわかるように伝えていきたいものです。幼児は多くの人とさまざまにかかわりながら、その人々をモデルに実体験を通して学んでいきます。自分が困っているときに助けてもらい、ほっとした気持ちを味わった体験は心の中に生き続けていくのではないでしょうか。周囲の人々の気遣い、心遣いが子どもたちのモデルです。



知っ得

子どもは生まれたときは誰でも「白紙の状態」です。その後のかかわりがキーポイントです。「子は親の鏡」です。子どもの育ちのモデルとしての自分の存在…。バッチリ!?

課題意識

成長発達にとっての意味

課題は自分自身が解決しなければならないものであったり、保育者から与えられるものであったりします。また、「課題意識」は与えられた課題を受け止め、それを果たそうとする意識やその解決・解明に伴う力までも含めたものと考えます。

幼児期の教育は幼児が周囲の環境に主体的にかかわって生み出す活動、つまり遊びということになりますが、その遊びを通しての指導が中心となります。しかし、その遊びだけでは発達に必要な体験が十分に保障できないこともあり得ます。そこで保育者は活動の幅を広げ、経験を豊かにするために、環境を構成したり活動を示したりすることで、幼児自身が「こんなに楽しいことがあるんだ」と気づくようにしていくこともあります。しかし、４歳児の前半ころまでは、自分の興味が活動の中心的動機づけの状態なので、保育者が一方的に課題を与えてもあまり意味がありません。しかし、次第に周囲の友達に刺激を受けて「自分もしたい」という目標をもったり、周囲の環境から「これをする」という目的、つまり自分なりの課題をもって取り組んだり挑戦したりするようになります。このころになると、保育者から示された課題でも自分としてのめあてや課題がもてるようになります。さらに５歳児になると、その課題を達成するためには自分が何をすればよいのか、どんな努力をしなければならないのかという課題意識がもてるようになり、主体的に取り組むようになります。その達成のために、あきらめずに繰り返し挑戦したり試行錯誤を繰り返したりする姿が見られます。このころには、個々に取り組むだけでなく、４,５人のグループで課題に向かって取り組めるようになります。しかし、まだ課題の受け止め方には個人差がありますので、メンバーによってはさまざまな行き違いや思い違いによるトラブルが生じます。例えば４月中ごろに４人前後で“大きなこいのぼり”を作ろうという課題を与えた場合、一人で自分のイメージで進めようとする、他の友達の意向を気にする、何をするかわかっていない、自分の考えがもてないなどさまざまな状態が見られます。しかし、保育者が一つひとつのグループにかかわりながら調整していくと、共通の目的がもてるようになります。

苦労しながらもグループの友達とやり遂げた達成感や一体感などを実感することは、成長にとって大切な経験となります。このような体験を積み重ねていくと、遊びの中でも共通の目的がもてるようになり、その目的を達成するために乗り越えなくてはならない課題を自分たちで見つけ、努力するようになります。このような協同する体験が大切です。また同じグループの仲間が困ったり悩んだりしているときには、一緒に考えたり情報を伝えたりして、本人が自分の力で乗り越えられるよう支え合う姿も見られるようになりますが、このような姿は、５歳児も後半になって個も集団もある程度育ったころに可能になります。

子どもの姿 1　「大きな声になったね！」（5歳児）

10月、運動会で昨年同様、年長組が司会をすることに職員会議で決まり、担任は子どもたちに伝え、「つき組のみんななら大丈夫」と励ましました。屋外の広い場所でしかも大勢の前で司会をするということは、子どもたちにとっては大きな課題です。その他にも園全体の行事を進めていく中で、年長児に期待される役割はたくさんあります。司会の役になったグループの子どもたちはみんなで言葉を考えたり順番や割り当てを相談して決めたりして、役割を果たすための活動に取り組んでいます。マイクロホンを持って台の上に立って割り当てられた自分の言葉を言う子、それを聞いたり自分の言う言葉を書いた紙をじっと見たりしている子などさまざまです。「家でも練習しているよ」と報告にくる子もいます。一人ひとりに「自分がやることをしっかりやろう」という意気込みがみられ、課題意識をしっかりもっていることがうかがえます。

コウタはユウと年少組のリズムの紹介をします。日ごろから大きな声で話すのが苦手なコウタですが、ユウが前半を紹介し、後半をコウタが言うように決め、一緒に練習していました。二人のときには大きな声で言えるようになり、ユウからも「大きな声で言えるようになったね」と言われ自信がもてるようになったコウタです。運動会当日になりました。クラスの友達の前では言えたコウタでしたが、ユウが言い終わったのに言えません。大勢の観客に見つめられている雰囲気にあがってしまったのか、言う言葉を忘れてしまったのか…。

ユウが心配そうにコウタのほうを見ると、コウタもユウの顔を見ます。ユウがうなずくとコウタもうなずいて大きく深呼吸をして落着きを取り戻すと、しっかり前を向いてはっきりと大きな声で言いました。そのとき、ユウはしっかりとコウタの手を握っていました。二人は司会の役を果たし、ほっとした表情で台から降りてきました。晴れやかな顔で自信をもった足取りでした。担任も課題をやり遂げた二人に「やったね！」とうれしそうに声をかけました。

子どもの姿 2　「そう、もう少し」「今の感じでいいよ」（5歳児）

年長組では12月から投げゴマの遊びが始まりました。ひもを巻くのが難しいうえに、やっと巻けてもなかなか回りません。１月になると、冬休み中に家庭で父親などに教わって回せるようになった子が増えてきました。ハヤタは回せるようになったのがうれしくて、回せる子を誘っては、どちらが長く回せるかを競い合っていました。１月下旬になってほとんどの子が回せるようになったので、クラスでコマ回し大会をすることにしました。ハヤタは「おれは回せるんだ」と張りきっています。担任は個人戦ではなくグループのメンバーが一人ずつ出て回し、その総合点で決める団体戦であることを伝えました。ハヤタはそれでも張りきってグループのメンバーに「カブトグループが絶対勝つよ」と自信満々です。ところがグループのメンバーのカズヤとヨシコがまだうまく回せません。ハヤタはちょっと慌てた様子です。ハヤタに自分だけがよくてもだめなのだと気づいてほしい担任は、ハヤタがどうするか様子を見ることにしました。しばらく考えていたハヤタは、カズヤとヨシコに「しょうがない、教えてやるよ」とひもの巻き方や投げ方のコツを教え始めました。ハヤタは自分のめあてを実現させるには、全員がコマを回せないとならないという課題に気づき、そのためにはどうすればよいのかという課題意識がもてたようです。

日ごろは友達をほめることのないハヤタでしたが、「そう、もう少し」「今の感じでいいよ」と二人に声をかけ、繰り返し一緒にやっています。ハヤタの熱意に二人も一生懸命です。そしてついに回せるようになって、「先生、カズヤくんたちが回せるようになった！」と自分のことのように喜んで報告に来ました。担任は、ハヤタがコマ回し大会にグループの仲間と「コマが回せるようになろう」という共通の目的に向けて意識をもって課題に取り組んだこと、そのことをやり遂げたことで「一緒に」ということの意味が実感できたであろうことをうれしく思いました。

子どもの姿 3 「よし！ 卵を作って最初から隠れていることにしよう」（5歳児）

2月に行われる子ども会でグループごとに表現活動をすることにしました。ショウタたちのグループは「はらぺこあおむし」の劇です。以前保護者にペープサートで見せてもらったのが共通のイメージになっています。ショウタは、はじめ青虫にいちごをあげるうさぎの役になりましたが、あまり気乗りしないようです。担任が一緒に参加して内容を話し合ことになりましたが、他にやりたい役がないので仕方なく参加しているという態度が見受けられました。しばらくそれぞれに考えているようでしたが、ちょう役のミスズが「ちょうがはじめに飛んでいって草のところで卵を産むっていうのはどう？」と言ったのをきっかけに、それぞれにイメージしたことを話し始めました。

「卵ってこの位の大きさかな？」「もっと大きいほうがいいと思うよ。だって青虫のソラちゃんが出てくるんだから」「卵はどうやって割れるのかな？」「真ん中から半分にギザギザって割れるのは？」「パカって割れた方がいいよ。ももたろうみたいに」といろいろな考えが出てきました。すると「青虫が隠れていて出てくるのはどう？」とショウタもいつの間にか発言しています。「よし！卵を作って最初から隠れていることにしよう」とスグルがショウタの考えを受けて言い、メンバー全員が賛成しました。みんなで考えを出し合い知恵を出し合って活動が進んでいきました。ショウタは、ずっと悩んでいたようでしたがある日、自分の役のうさぎをかぶとむしに変えたいという思いをやっと伝えました。「ショウタくん、かぶとむしね」と承認されるといっそう積極的になり、仲間と「はらぺこあおむし」の看板も作っていました。この活動を通してグループの友達と一緒にすることの楽しさを感じ、仲間と成功させようとする意識が高まっていきました。

当日は大勢の観客の前でいきいきと演じ、大きな拍手と「卵から生まれるところがよかった」「かぶとむしが強そうだった」という感想をもらい、満足感、達成感を実感したようでした。

＊指導及び援助のポイント

保育者から課題を投げかけるときには、子どもたちが「ちょっとがんばればできるかもしれない」とか「こうすればいいかもしれない」など、自分なりに見通しがもてるような内容と示し方であることが大切です。子どもたちの課題の受け止め方や課題の理解の仕方には大きな差があります。一人ひとりの日常の生活と考え合わせて、ヒントを出したり励ましたりしながら努力や工夫を認め、個々にその変容や成長を伝えることも大切です。

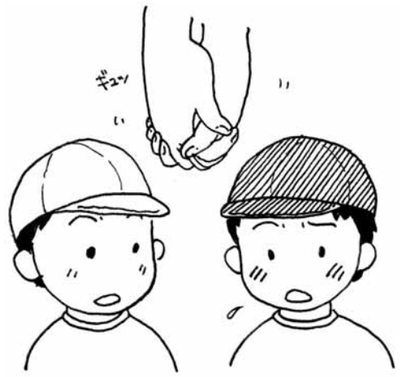
子どもたちが課題解決に向けてさまざまな取り組みをしていく過程では、一人ひとりがどのような意識をもっているのか、乗り越えるためにはどのようにアドバイスするとよいのかを把握することが大切です。また、子どもたちは課題に向けて真剣に取り組んでいるときは、そのことを家庭で話したり悩んだりして、家庭でもふだんとは異なる様子が見られたりすることがあります。保育者から大きな課題を投げかけたときなどは特に、家庭にその意図を伝えたり家庭での様子を知ったりすることは、子どもの様子を知るためにも保護者の不安を解消するためにも大切です。特に、グループなどで共通の目的に向かう過程では、意見や気持ちの行き違いからさまざまなトラブルを引き起こすことも考えられますので、十分に留意したいところです。

グループで共通の目的に向かって活動するときは、一人ひとりが力を発揮できる状況をつくることが大切です。中には意識が低かったり、理解不足、力不足でなかなか一緒にすることが無理な子がいる場合があります。そのようなとき、その子を非難したりないがしろにしたりして、できる子だけで進めるようなことがないようにしなければなりません。保育者は、グループのメンバー構成や一人ひとりの意識や力量を把握したうえでの配慮が必要です。子ども同士の思いをつなげたり、互いに相手に目を向けたり、ともに乗り越えていこうとする意欲や気持ちがもてるように子ども同士のかかわりを把握して、アドバイスしていくことが大切です。

個々の課題にしろ、共通の課題にしろ、自分の力を発揮して乗り越え、達成した喜びや満足感を実感した体験を通して子どもたちは大きく伸びます。この期待をもって援助していくことは保育者の大きな喜びともなります。

知っ得

幼児期に自分や友達との共通のめあてに向けて努力し、やり遂げた喜びを実感することと、そのことで周囲からの賞賛をもらったうれしさの体験を積み重ねることが大切です。



がまん・抑制力

成長発達にとっての意味

最近の子どもは「がまんが足りない」、「抑制がきかず、すぐにキレる」と言われますが、果たして子どもだけでしょうか。世の中全体にそのような傾向があるのではないかと思われる向きがないではありません。このことはさておいて、子どもはまず、自分の欲求をもち、それを実現し、満足感・充実感を得ることが望ましい成長・発達にとって大切であることは言うまでもありません。だからといって、やりたいことをいつでもどこでもやりたいだけしてもよいということではないのも当然です。ここに「がまん」があるわけですが、年齢の低い子どもでは、往々にして自分の意思・欲求に反して「がまんさせられる」状況に出合います。多くの子どもはまず、大好きな保護者とのかかわりで出合いますが、がまんすればほめられる、ご褒美があるなど、いいことがあるという見返りがあったりして「がまんね」と言われるとなんとなく受け入れられるようになっていきます。しかしこのがまんの度が過ぎると、「欲求不満」を引き起こします（「欲求不満」P106〜107参照）。

「がまんする」「がまんできた」といっても５歳未満では他律的ながまんが多く、自分の意志で「がまんしよう」「しなければ」と周囲の状況から判断して思えるようになるのは、６歳近くになってからではないかと考えます。このころになると、自分で自分の気持ちをコントロールできるようになり「抑制」が可能になります。この抑制力は、自分ががまんしたことが自分にとっても周囲の人にとってもよかったんだという実感の積み重ねの中で、徐々にはぐくまれていくものと考えられます。

がまんや抑制は、人格の形成の状況と大きくかかわりますし、この経験は人格の形成に大きく影響します。つまり、人を育てるうえで大切な行動であると言えます。

子どもの姿 1　「いやだ！すべり台やりたい！」（４歳児）

４歳児のヤスオは興味のあるものが目につくと、周囲の状況や物事の善し悪しに関係なく気の向くままに自分のしたいようにします。ある日のこと、園庭でビールのケースを抱えて砂場の方に行こうとしたヤスオは、すべり台で数人の幼児が遊んでいるのに気づき、ケースを園庭の真ん中にほうり出してすべり台に駆けて行き、並んでいた子を押しのけて階段を上ろうとします。そばにいた担任が「ヤスオくん、順番だよ。並ぼうね」と言うと、「いやだ。すべり台する」と言い張ります。担任は「並んで待てなければすべれないの。みんなも早くしたいのをがまんして待っているのだから、ヤスオくんも待ってないとね」と言います。それでもヤスオは先に上ろうとするので担任は、「それにヤスオくん、ビールのケースをあそこに置いたままでしょ。あれを片付けないとみんなが邪魔で困るの。先生も手伝うから一緒に片付けよう。その代わりにこの場所をみんなに頼んで取っておいてもらうから。みんないい？ここヤスオくんの番にして」と言うと、「いいよ。ヤスオくん、早く片付けておいで」と言われます。ヤスオは担任と一緒に片付けに行き、戻ると自分から並びました。担任は「ヤスオくん、よかったね。みんなが取っておいてくれて。楽しくするのにはがまんもしないとね」と言うと、「うん」とうなずいていました。

子どもの姿 2　「やめろよ　わざとじゃないんだぞ」（５歳児）

５歳児の男児が数人でそれぞれにトイレットペーパーの芯をさまざまにつなげて剣を作って、戦いごっこをしていました。ところがしばらくして、トモヤと戦っていたソウタの剣が途中から折れてしまいました。するとソウタは、「オレが一生懸命作ったんだぞ」とトモヤにくってかかり、トモヤは困っていました。同じ遊びをしていたタカヤがソウタを押さえながら「やめろよ、わざとじゃないし遊んでいたんだから。それぐらいがまんしなくちゃ。直せばいいんだから」と言うと、すかさずカツヤが粘着テープを持ってきます。

みんなで手伝って直し、すぐに戦いごっこが始まりました。遊びが一段落したころ担任は「ソウタくん、友達に言われてすぐにわかってがまんできたの。よかった。タカヤくんとカツヤくんのおかげだね。トモヤくんもこれで安心できたし。自分たちで解決できるようになって大人になってきたんだ。先生、うれしいな」と伝えました。

＊指導及び援助のポイント

この指導のポイントは大きく２点考えられます。一つは自分を出せずにがまんしすぎている場合、もう一つは、思い通りにしすぎてがまんできない場合です。どちらにも共通して考えなければならないのは、その子がそのような状態になる背景です。今までの生活の体験、保護者をはじめ家族との関係など複雑な要因が考えられますから、個々に応じて要因の改善を図っていくことが必要になります。大人によってはがまん強いのをよしとする向きもありますが、幼児の場合は、まずは自分の欲求を表したうえで、充足とがまんの両方を体験することが望まれます。がまんしているだけでは真の意味での抑制力の育ちは望めません。

年齢の低い子どもは、がまんすることがどういうことなのかわからないことも多く、大人から「がまんしようね」と言われ、「うん」と言ってもすぐに駄々をこねたりわがままを言ったりします。このときに大人は「何回言ったらわかるの！」などと腹を立てずに、じっくりと「がまんできるのね。えらいね」と言いながら、どういうふうにすることがいいのか、がまんするとはどういうことかを伝えていくことが大切です。そして、できたときに大いにほめられたことが体験として残り、次にいかされます。子どもは、「前よりもがまんできるようになったね」と認められることで自分の成長を実感します。友達との生活の中でこのような体験を積み重ねると５歳児くらいには、保育者や保護者に言われるよりも友達との関係でがまんしたり譲歩したりできるようになります。これは一人ひとりの子どもに自尊心の育ちとともに、いつまでもわがままを言ったり固執して譲れなかったり、がまんできないのは「子どもっぽい」という気持ちも芽生えてくることにもよります。

知っ得

頭から押さえつけて「させられるがまん」はなりませんが、自分が納得して「するがまん」は結構根気よくできるものです。

かみつき

成長発達にとっての意味

言語がまだ十分に使いこなせない時期でも、既に他者とのコミュニケーションを楽しみたい子どもたちです。大人とのコミュニケーションでは大人側からの問いかけに対して答えますし、自分からは自分なりの言葉や動きで問いかけられます。したがって欲求や要求が実現できますが、子ども同士ではまだ難しい段階です。自分の思いが相手に伝えられないとき、伝わらないときに、「かみつく」という行動は、手っ取り早く状況を変化させる手段となります。かみつくと相手が泣き大人が来てくれる。その様子を見てまねをする子どもが必ず出てきます。他者へのメッセージがあふれているものの、言語では表現しにくく、伝わらないもどかしい気持ちがかみつくという行為に表れているようです。

多くは乳児から幼児期前期に多く見られますが、５歳ごろになっても、ときには友だちの腕や背、足にかみつくこともあります。このかみつきは、小さい子とは違い、感情的な行き違いや悔しい気持ちが高じて相手を攻撃するときに多く見られます。５歳児になれば相当に言語が発達するとはいえ、感情もトラブルの原因も複雑になり互いに十分に伝えきれず、伝わりきれないという状態も見られ、勢い、つかみ合いのケンカの末にかみつくということになります。相手を排除する気持ち、相手の存在を拒否するという強い気持ちのときに起こることもあります。こうなるとトラブルの要因や背景を修復するのには一筋縄ではいきませんが、わかり合えれば相手のことを受け入れるのも早いのが５歳児です。いずれにしてもかみつかれた子の痛みと、かみついてしまった子のやり場のない気持ちを周囲の大人が受け入れてあげることが、次第にかみつきをなくしていきます。

子どもの姿 1　「痛かったねぇー」（１歳児）

仲良く絵本を見ていた１歳児クラスのアキラとマリコ、保育士に読んでもらいながら、「ねぇー」と顔を見合わせてはニコニコ笑い合っています。読み終わった絵本を二人でめくりながら見合っているので、ほほえましく思いながら、その場を保育士が離れたとたん、「わぁっ」と泣き声が。どうやらアキラがマリコの背中にかみついたらしいのです。マリコの背中にはくっきりと痛々しくかみ跡が残っています。マリコが泣き、保育士がとんできたのに驚き、アキラも泣き出してしまいました。

保育士は、二人をひざにのせながら「マリコちゃん痛かったねぇ。アキラちゃん、マリコちゃんとお話したかったんだって」と伝え、アキラには「マリコちゃん痛かったんだよ、かんじゃだめだよね」とそれぞれに伝えています。二人は、保育士のところでなぐさめられ、また遊び始めました。遠くから見ていた別の保育士が、「アキラちゃんが、マリコちゃんにねぇねぇと盛んに声をかけていたんだけど、マリコちゃんはそのときは別の本を見ていて気づかなかったみたい」とのこと。その保育士も止められないほどあっという間の出来事でした。

＊指導及び援助のポイント

かむことがいけないことは確かですが、だめと叱るより、大人が子どもの気持ちを的確に表現してあげることが効果的です。かまれた側には「痛かったねえ。でもお話したかったんだって」と、かんだ側には「とっても痛かったんだよ、かんじゃだめだよね」など、それぞれの気持ちを代弁して、それぞれに伝えることが大切です。また１,２歳のころは、困ったら保育士のところに来るように伝えるなど、かまなくても済む方法を具体的に教えてあげることも一つです。また、保育の場では、トラブルが起きないような玩具や遊具の設定、生活動線を工夫することも大切です。

言語を急速に獲得していく１歳児は、他者とのコミュニケーションへの関心・意欲を十分にはぐくむことと、他者の気持ち・本人の思いなどを的確に代弁してあげることが非常に大切で、大人も言葉を選ぶ必要があります。４,５歳では友達関係が良好であれば、相手を傷つけるようなことはありませんが、情緒面で課題があったり、クラスの中での自分の存在に不安を感じたりすると、感情の表出が荒々しくなることがあります。かみつくことはいけないこと、相手を傷つけることはいけないことだとわかるように話すことも大切ですが、一方ではかみつくという行為をせざるを得ない心情や背景にも目を向けることが必要です。さらには相手の痛み（傷の痛み・心の痛み）が互いに感じられるような助言も大切です。年齢の低い子どもの場合、すぐにはわからないだろうと思えることも、繰り返し伝える中でわかるようにしていきたいものです。保育者とクラスの中での友達との関係、家庭での親子・兄弟関係、また情緒面での状況を把握し、家庭と園が連携を図りながら情緒の安定を図っていくことが大切になります。

知っ得

かみつきという行為も子どものサインの一つ、子どもとのかかわりや、ふだんの生活を振り返ってみましょう。何歳であっても一人ひとりの子どもの気持ちが満たされ、安定しているかどうかを体調とともに把握しておくことはとても大切です。